

日仏東洋学会 通信 第二号

一九八四年六月発行

フランス・シノロジー体験記

興膳 宏

一九八二年四月から翌年の一月末まで、文部省在外研究員としてパリに滞在し、フランスの中国研究の一端に触れる機会を得た。出発前、「中国文学の研究のために、なぜまたパリへ？」という質問をしばしば受けたのには、正直いって面くらった。中国研究者が中国へ行くことと意義を私はもちろん重んずるが、一方またヨーロッパ世界の眼を通して中国や日本を見つめなおすのも、それなりに意義のあることと思っていたからだ。そしてその気持は、帰国後のいま、いっそう強いものになっている。

パリでは、まず *Ecole pratique des Hautes Etudes* (高等研究院) の第四部門、すなわち歴史学文献学の部門で、J・P・ディエニ教授の講義を聴講した。ディエニ氏はフランスにおける中国古典文学研究の俊秀で、「詩経」や古楽府・「古詩十九首」などに関して、ヨーロッパ文学との比較文学的視点をもまじえた精緻な研究成果を数多く発表しておられる。私は二十年前、氏の京都滞在中に知遇を得たが、今回の渡仏では身元保証人になっていただいたほか、日常生活の諸面

についてもずいぶんお世話になった。*Hautes Etudes* の講義は、十一月に始まって、翌年の五月で一サイクルが終了する。だから私は八二年度の講義の終り二か月と、八三年度分の初め三か月に出席したことになる。

この学校はソルボンヌの建物の一角にある。時代のついた段階を上って二階へ出ると、右手が歴史学文献学部門の教室、左手が宗教学部門(第五部門)の教室になっている。教室というよりはセミナー室という方がふさわしい、日本流にいえばうなぎの寝床という形容がぴったりの、細長い一室がわがディエニ教授の講義場にあてられていた。毎月曜日、二時からの開講というので、定時前に行って待っていると、二十人も坐れば満席になりそうな部屋が、やがて超満員にふくれあがった。この学校の講義を聴くには、授業料を納入する必要もなければ、受講登録をする必要もない。ただ授業中に回覧されてくる大学ノートに、自分の姓名を記入すればよいのである。そして講義の内容といえ、大学院専攻科程度に照準を合わせた、かなり質の高いものである。そうしたことは耳学門としてかねて聞いてはいたが、教育制度や教育観のちがう世界から参席した者には、やはりずいぶん不思議なシステムに映った。

最初はどうな人が受講しているのか皆目わからなかったが、おおい顔なじみになって話を聞いてみると、修士 (*Maîtrise*) や博士 (*doctorat de 3^e cycle*) の論文を準備中の学生はもとよりとして、大学の助教授・講師クラスの人、そして好きで受講しているとい

う主婦まで、年齢も性別も人種も職種も、まさにとりどりであった。そういえば、ディエニ氏の同僚である考古学のピラゾリ教授も、一時期この講義を聴講しておられたことがあった。

さて、講義の内容だが、今期のテーマの一つは龍のサンボリスムについて。龍は変化して測られずというが、龍のイメージが持つ複雑にして多様な性質を、ディエニ教授は先秦から六朝に至る豊富な文献に拠りつつ、折々ヨーロッパ古代文学に対する深い知見をにじませながら、鮮やかに説きあかしていった。確かに氏の説かれるように、龍のイメージの時代による変化を正しく掌握することは中国古代文明を理解するための一つのカギとなりうるだろう。講義のもう一つのテーマは顧炎武の『日知録』で、この方は講読形式の授業、翌八三年度にはこれに代って甲骨文入門が始まった。とにかくこのようにして、二時から四時までの充実した時間を過すことができた。近年、自分の講義の準備に追われる一方なので、人の講義をじっくり聴くことの面白さを再認識した次第である。秋からは、ディエニ氏の講義に加えてスワミエ教授の敦煌图像学^{イコングラフィ}研究、シッペル教授の天師道研究の講義にも出て、いっそうその感を深くした。

ここでフランスの中国古典研究についての管見的印象を述べさせてもらおうと、敦煌研究と道教研究の両分野において、ことに活気が横溢しているように思われた。いずれもこの国の長い伝統を持つ研究部門だが、道教研究ではこの二三年のうちにシッペル氏の『雲笈七籤索引』上下巻や、ラガウエイ氏の『無上秘要研究』などの基礎的で重要

な研究成果が世に出た。パリはヨーロッパにおける道教研究のセンターになっており、シッペル氏を中心として、イギリス・ドイツ等諸国の学者を一堂に会する研究会が定期的に開かれている。またスワミエ氏の主宰する敦煌研究班では、ペリオ文書の目録編纂の仕事が着実に進行中であり、近くその第三冊が上梓される予定と聞いている。現在利用の便という点でいえば、Bibliothèque Nationale 所蔵のペリオ文書は、British Library 所蔵のスタイン文書に劣ること数段であり、我々としても目録の早い完成を願ってやまない。

それらの分野に比べると、文学研究の部門はやや寂しい。李治華氏とジャクソン・アレザイス氏の共訳による『紅樓夢』の全訳がプレイアード叢書の一冊として出るというようなことはあったが、詩歌の研究では、D・ホルツマン氏の「嵇康の詩」(Journal Asiatique CCLXVIII(1980))などを除けば、あまり目だった論稿が認められないようである。ディエニ教授の講筵に列していた若い人々の間から、ぜひすぐれた古典文学の專家が現われてほしいものである。古典研究の新しい波を予感させる動きの一つとしては、パリ第八大学の人々による雑誌 *Extrême Orient—Extrême Occident* の刊行がある。

Extrême Occident はもちろん新造語だが、中国や日本からすれば、なるほどヨーロッパは極西にちがいない。ヨーロッパ人として極西の眼によって極東文明を見つめる一方、極東の眼を以て極西の文明を見直すという意図か。我々極東の人間にとっても有意義な問題提起を期待したい。(京都大学教授・中国文学) 一九八四・五・一

◎ 前回の会員総会と講演会の報告

(文中、敬称略)

三月十四日(水)当日は、生憎と降雪の日になってしまったが、関西からわざわざ見えた興膳、坂出両氏なども含めて、かなりの数の会員が来会された。

総会は、定刻五時から、日仏会館の二階会議室で開催。総会議長には榎一雄会長が当った。昨年七月の再建総会で提案された会則と役員とが、先ずここで正式に承認された。

次いで、前回未定の議事に移り、正会員の年会費が参千円に、賛助会員の年会費が壹万円にそれぞれ決定された。それに伴って、会計幹事に川崎ミチコ、監事に池田温、原実の三氏が推挙され、承認を得た。その間、議題の説明役には、議長の他に、弥永信美、松原、福井が当った。

日仏学者交換協定について、弥永昌吉評議員から、改めて詳しい説明があった。

学会の現状報告として、会員数が今では百名を超え、日仏会館の関連学会二十三の内では、十三〜五番目の会員数である旨の報告もあった。(新しい会員名簿は来春刊行の予定)

また、次回総会と講演会が六月二十八日(木)午後五時半より開かれることが決められた(詳細は別紙を見られたい)。

総会が無事終了後、六時より、榎会長による記念講演「アルカディウスII オアンジュをめぐって」に移った。ヴァンデルメルシュ学長が日本語でその司会を勤められた。講演の内容は、十八世紀のフランス(パリ)に滞在した一シナ人、オアンジュをめぐって、東西文化交渉史の隠れた一面を詳細に説き明かすものであって、聴衆に多大の感銘を与えた。この「通信」の性格上、その全文を載せることはできないが、その一部分は「ヨーロッパとアジア」(大東出版社刊、昭和五八年)に見ることができるし、また、講演録音はとってある。

講演後は、ヴァンデルメルシュ・フランス学長からの招待で、日仏会館五階の学長室において、レセプション(カクテル・パーティ)が開かれ、学長御夫妻から暖かいもてなしを受け、雪の一夜を楽しく過ごすことができた。

会費納入についてお願い

前回三月の総会で、学会費が年参千円と決定されました。この三月末までは、日仏会館が必要経費をすべて負担してきてくれたのですが、四月からは自力で運営していかなければなりません(今後は、活動の程度に応じて、日仏会館は補助額を決めるようです)。

今年度会費未納の方は、振替用紙を同封しますので、できるだけ速やかにお払い込み下さいますよう、事務局としてお願いいたします(入れ違いでお払い済みの方は、御容赦願います)。

会費 送付先 東京一―一三四五八四 日仏東洋学会宛

なお、念の為に附記しますならば、日仏会館の会員イコール日仏東洋学会の会員とはなりません(その逆も同様です)。従いまして、両者の年会費は全く別途会計ですので、日仏会館の会員(通常会員であれば年額五千円)でありましても、本会へは別に参千円お送り下さい。先の『通信』第一号の第1頁と「その他のお知らせ」②(5頁)とに右のことを書いたつもりでしたが、遺憾ながら、会員の一部の方に混乱を生じてしまいました。事務局の説明不足でもありましたので、善処方を望む方はお申し出下さい。

○ サロンと集会場の開設

皆様方からの御寄附により、日仏会館一階に、「フォワイエ」Foyer(団欒の場)という名の小さい部屋が造られました。五人〜二〇人程度までの会合に最適で、学会員であれば、三時間二千円(学会固有の会合の場合は無料)で使用できます。詳しい利用法につきましては、学会幹事の弥永信美あるいは福井、または日仏会館三階事務所の林氏にお問い合わせ下さい。

○ 会員名簿の追加と訂正・変更

A 追加

藤枝 晃 FUJIEDA, Akira

京都大学名誉教授 東洋史学

石塚晴通 ISHIZUKA, Harumichi

北海道大学文学部教授 国語学

高橋 稔 TAKAHASHI, Minoru

東京学芸大学助教授 中国文学

竺沙雅章 CHIKUSA, Masaaki

京大文学部教授 東洋史学

川合康三 KAWAI, Kozo

東北大学文学部助教授 中国文学

里道徳雄 SATOMIUCHI, Norio

東洋大学助教授 中国仏教

磯波 護 TONAMI, Mamoru

京都大学人文科学研究所助教授 東洋史学

渡会 颯 WATARAI, Akira

大正大学総合仏教研究所研究員 中国漢代思想

C 変更

濱田正美

法政大学経済学部

B 訂正箇所

1 金岡照光

2 村上郁子 MURAKAMI, Ikuko → 村山郁子

MURAYAMA, Ikuko にする

3 三根谷 徹 電話

4 定方 晟

5 滋賀秀三

6 田中文雄 中国宗教学 ↓ 中国学にする

(次下「通信」第一号で追加した方々)

7 和田久徳

8 赤松明彦

9 高田時雄 TAKADA → TAKATA にする

訃報

神田喜一郎(顧問)と川勝義雄(評議員)の両氏が四月中に相い次いで亡くなりました。学会として、御葬儀に弔意を表しました。謹しんで御冥福をお祈りいたします。

|| 学者交換について ||

日仏会館学術委員会から、次のような通達が昭和五九年五月二一日付けで学会あてに届きましたので、御知らせします。

文部省補助金による学者交換について

昨年同様、下記(一)、の方のフランスへの渡航と(二)、の方の日本への招待を実施いたしたく存じます。

(一) 日仏会館の会員である日本の学者で、フランスの大学等で講演、セミナー等を開き、日本の研究状況をフランス学界に伝えていただける方。

(二) 業績の注目されているフランスの学者で、日仏会館その他、日本各地の大学等で講演、セミナー等を開き、今後の日仏学術

交流の推進に寄与していただける方。

(一)、(二)とも東京・パリ間往復航空旅費(実費)および次の基準による滞在費を差上げることといたします。(Aは年長の方、Bは中堅の方とします。)

(一) A	一日 一万五千元	一〇日以内
B	一日 一万円	三〇日以内
(二) A	一日 二万円	一〇日以内
B	一日 一万五千元	三〇日以内

以上今年度の予算によりますので、一九八五年三月中旬までに終るようにせねばなりません。

なお(一)の方は帰国後報告書を提出していただきます。(二)の方については、離日後招待の責任者の方から報告書をいただきたく存じます。

貴会関係で(一)、(二)それぞれ適当と思われる方がありましたら、六月三〇日までに御推薦下さいますようお願い上げます。

付記

昨年十二月にお届けしました会員名簿には誤記が多く、会員各位には御迷惑をおかけしました。また、その後入会された方も多いので、来春には新たな名簿をお届けしたく準備中です。

最後になりましたが、昨年七月の再建総会の準備段階からこの三月まで、本会は財政的に日仏会館フランス側の全面的な援助によって運

営され、またその間、会館三階のフランス事務所の林春郎氏に、事務上のことでたいへんお世話になりました。学会事務局として、記して感謝する次第です。

なお、「通信」第一号にも書きましたように、フランス東洋学の動向、日仏両国の学者交流などについての情報・記事を歓迎いたします。ふるって御寄稿下さい。

(学会事務局)

連絡先

〒一〇一 東京都千代田区神田駿河台二一三

日仏会館内

日仏東洋学会事務局

(電)〇三―二九一―一四四